

特集にあたって

有益な医療デバイスを使いこなせる 「人間力」ある医療者を目指そう！

企画・構成 古屋 聡 Furuya Satoshi
(山梨市立牧丘病院整形外科)

近年における、医療デバイスの進歩には著しいものがあります。かつて「在宅医療の三種の神器」といえば、「血圧計」「体温計」「ペンライト」だったかもしれません。「検査機器をもたない簡素な医療」であった「往診」は、さまざまなデバイスの普及により、その様相を変えてきました。ポータブル医療デバイスとして長らく酸素飽和度モニターがエースでしたが、現在は安価となって医療者1人1台が当たり前の標準装備となり、いまや患者家庭に1台の時代になりつつあります。医療デバイスといえば現在はそのエースの位置にはポータブルエコー(持ち運びできる超音波診断装置)もしくはポケットエコー(掌に乗るサイズの超音波診断装置)が座っていて、在宅医療での診療能力を劇的に進化させています。同時に記録ツール・コミュニケーションツールとしてパソコン、スマートフォンの存在も欠かせません。モバイル電子カルテはもちろんのこと、診断や投薬のための検索アプリや、医療介護用 SNS などの日々の発展は、ウェアラブルデバイスの発展とあいまって、患者情報を即時的・経時的に多職種間で(さらに患者とも)共有することを可能にしました。患者からの質問によっては、参考文献をその場で参照し、エビデンスについて答える場面も生じます。今後は急速に診療現場に導入されていくことが見込まれる AI や、遠隔医療のためのツールも視野に入ってきます。

しかしながら、すべてのデバイスを使うのは人間であり、現場で判断するのも人間、患者に直接話すのも人間で、実はデバイスにしばられない「人間力」が「診療の質」を決定することもまた事実です。デバイスに対するスタンス、そしてその使い方、「医療情報についての考え方」、ネットリテラシーなど、デバイスをめぐり医療者があらためて知っておかなければならない内容も広範になっています。

本特集では、とにかく現場の「在宅医療に使えるデバイスの実践使用の Now」を紹介し、私たち医療者がデバイスを使う実際、メリット・デメリット、そしてこれからの展望と可能性について幅広く論じ、さらに、私たち医療者がデバイスを使う意味についてあらためて考えてみたいと思います。

また在宅医療のデバイスとは異なりますが、地域保健医療における IT 活用の実践を、鹿児島県肝付町から紹介いただき、私たちの活動の参考にさせていただきたいと思っています。